

中世ヨーロッパにおける歴史叙述とナショナル・アイデンティティ形成に関する研究

Historical Writing and National Identity in Medieval Europe

プロジェクト代表者: 鈴木道也 (教育学部・助教授)

Michiya SUZUKI (Associate professor/Faculty of Education)

1 はじめに

本研究は、13世紀後半にフランス王権が制作した『フランス大年代記(Grandes Chroniques de France)』以下GCFと略記と呼ばれる俗語年代記およびその写本群を対象に、①制作過程、②内容構成(間テキスト性)、③普及過程の検討を通じて、集合的記憶として中世国家フランスのナショナル・アイデンティティが形成され定着していくプロセスを具体的に明らかにしようとするものである。平成17年度は主としてその初期写本群(13世紀後半から14世紀前半にかけてヨーロッパ各地で制作されたGCF写本)に関する文献学的分析を行なった。以下2-5ではその内容と成果および課題について報告する。

2 初期写本群の普及とその特徴

現在、GCF写本は120点ほど残存しているが、その多くは14世紀後半から15世紀にかけて制作されたものである。中世歴史叙述にとって120点という写本数はそれがベストセラーであったことを示しており、研究者の中にはGCFを『フランス史のバイブル』と称するものもある。GCFの後世への影響は大きく、現代フランス歴史学もGCFの章構成や時代区分に沿って中世史を叙述する傾向にあることが指摘されている。しかしその一方で、13世紀後半から14世紀半ば、つまり年代記の完成から一世紀ほどの期間に関しては、国家事業として展開されたGCFに対する聖俗有力者の関心は高くはなく、この間に制作されたと想定される写本の数は19点で、現存する写本全体の一割強にとどまる。下図は、形態学的分析により1274年から1375年(この時、GCFは当時のフランス国王シャルル5世の指示で改訂第二版が制作される)までに制作されたと推定される19点のGCF写本について、その所蔵・分類番号・記述年代・写本制作依頼者もしくは所有者を記録年代の短いものから順に整理したものである。

写本番号・所蔵	記述年代	写本制作依頼者あるいは所有者と思われる者	備考
a British Library (London) Add.Ms.38128	起源〜フィリップ2世治世	?	
b Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.4	起源〜フィリップ2世治世	?	
c Bibliothèque Nationale(Paris),Ms.fr.2814	起源〜フィリップ2世治世	?	
d Bayerische Staatsbibliothek(Munich),Cod.Gall.4	起源〜フィリップ2世治世	?	
e Bibliothèque Sainte-Geneviève(Paris),Ms.782	起源〜フィリップ2世治世	フランス王国蔵書目録(1411年、1413年、1423年)に記録あり	
f Bibliothèque Municipale(Saint-Omer),Ms.707	起源〜フィリップ2世治世	?	サントメール教会に関する追記あり
g 個人蔵(スイス)	起源〜フィリップ2世治世	①ブルゴーニュ公ジャン(1371-1419)の署名 ②ブルゴーニュ公フィリップ(1396-1467)蔵書目録(1467年)に記録あり	
h Société des Autographes des Manuscrits Français(Paris) Ex-Bute Manuscrit(委託先 Bibliothèque Nationale)	起源〜ルイ8世治世	ペリー公ジャン(1340-1416)の署名	
i Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.14561-14564	起源〜ルイ9世治世	?	14世紀後半バリ制作の二写本と別の場所で制作された一写本の集成版
j British Library(London),Royal 16 G VI	起源〜ルイ9世治世	グロスター公ハンフリー(1414-1447)の署名	サン＝ドニ修道士ピエール＝ドルジュモンによる追記あり
k Bibliothèque Municipale(Reims),Ms.1469	起源〜フィリップ3世治世途中で	ランス聖堂参事会?	ランス教会史に関する追記あり
l Bibliothèque Nationale(Paris)Ms.fr.2615	起源〜フィリップ3世治世	?	
m Bibliothèque Municipale (Cambrai) Ms.682	起源〜フィリップ3世治世	カンブレール助祭長ラウール＝プレットル(1443)の署名	
n Bibliothèque Royale de Belgique (Bruxelles) Ms.5	起源〜1321年	ブルゴーニュ公フィリップ(1396-1467)蔵書目録(1467年)に記録あり	
o Bibliothèque Nationale (Paris) Ms.fr.10132	起源〜1329年	①シャルトルのバイイ、ピエール＝オノレ筆写依頼の前文 ②ショーモン領主ピエール・ダンボワーズ(-1473)の妻アンヌ・ド・ブイユの署名	
p Bibliothèque Municipale(Lyon),Ms.880	起源〜フィリップ6世治世	①シャルル6世の署名 ②ペリー公ジャンの署名	サン＝ドニ修道士リシャル＝レスコによる加筆あり
q Bibliothèque Nationale(Paris),Ms.fr.17270	起源〜フィリップ6世治世	リュジニャンの軍司令タンギー＝ド・シャテルの署名	サン＝ドニ修道士リシャル＝レスコによる加筆あり
r Bibliothèque Nationale(Paris),Ms.fr.23140	起源〜フィリップ6世治世	?	サン＝ドニ修道士リシャル＝レスコによる加筆あり
s Bibliothèque Municipale(Chartres),Ms.271	起源〜フィリップ6世治世	フランス王国尚書官ギョーム＝フロットの妻ジャンヌ＝ダンボワーズ(-1341年)の署名	

GCF写本の代表的研究者ベルナール＝グネは、ブラバント地方で制作されたと推測される一部のものを除けば(写本n)、初期写本のほとんどがサン＝ドニ修道院を始めとするパリ周辺の工房で制作されていること、また依頼者ないしは所有者も、確認されている限りでは国王本人や王族(写本e、g、h、n、p)あるいはノルマンディーからブラバントにかけての北フランス聖俗諸侯(k、m、o、q、s)であることを理由に、GCFの広がり当初はきわめて限定的で緩慢なものであったことを認めている。また、GCF写本に描かれた装飾画の分析で知られるエーデマンは、初期写本群の挿絵に関して、この時期の写本の社会的機能を象徴的に示すような特徴を見いだすことは困難であるとして、画期性を認めていない。そうしたなか写本oは、①リシャール＝レスコが加筆した修正版GCFを除けば、第二版のGCFが完成する以前の段階で王朝交代期(カペー朝→ヴァロワ朝)の1328年から29年にかけての記述を含む数少ないGCF写本(写本o、写本s)のひとつであること、また②サン＝ドニ修道院など教会関係の工房ではなく、パリの俗人書籍商に依頼して制作されたものがあること、などの特徴を持つ。したがって初期GCF写本群の性格について基本的にグネらの見解を認めるとしても、写本oに関しては、それが他の写本とはやや異なる目的と機能を有していたのではないかと、との推測は可能である。次にこの点について検討する。

3 B.N.Ms.fr.10132(写本o)の構成

下表は写本10132の構成を示したものである。

フォリオ	記述年代	記述内容
1-361v.	-1223	トロイア起源神話からフィリップ2世治世まで [1274年のGCFからの筆写]
362-400v.	-1316	ギョーム＝ド＝ナンジ『サン＝ルイの生涯』およびサン＝ドニ修道院修道士による『ルイ8世伝』、フィリップ3世、フィリップ4世、ルイ10世治世に関する追記
401-413v.	-1322 -1324 -1329	ジャン＝ド＝サン＝ヴィクトル『歴史の覚書』及びその続編のフランス語訳シャルル4世治世半ばまでに関する記述 シャルル＝ド＝ヴァロワ及びフィリップ＝ド＝ヴァロワ治世に関する記述

形態上、全体は二部分に分けられ、全413葉[フォリオ]のうち、終盤のフォリオ401から413までは文字も挿絵も別人の手によるものである。フォリオ400までが、1274年成立のGCFならびにギョーム＝ド＝ナンジを代表とするサン＝ドニの修道士たちによって加筆されたルイ8世(在位 1223-26)からルイ10世(在位1314-16)治世にいたる国王伝記の俗語翻訳版を筆写したもの、という形態をとるのにたいして、フォリオ401からはサン＝ヴィクトル修道院の修道士ジャンが記した年代記『歴史の覚書(Memoriale Historiarum)』末尾部分のフランス語訳を中心に、そこにさらに追記を施して1329年までの出来事を記している。

この二部分をさらに区分すれば、まずフォリオ400までの前半部分に関しては、写本制作者自身その内容をメロヴィング期、カロリング期、カペー期の三部分に分けている。この構成は、一人もしくは複数の王の治世をひとまとめにしながらか全体で18巻から構成されていた他のGCF写本とは異なっている。それはむしろ当時パリで知られていた別の年代記、通称『フランス史概略(Abrégé de l'histoire de France)』と呼ばれる、13世紀中葉にルイ9世の弟アルフォンス＝ド＝ポワティエの庇護を受けた一詩人が記したラテン語年代記の世俗語版の構成にしたがったもので、実際この写本の前文にはこの年代記冒頭部からの引用もうかがえる。フランス王朝の連続性を強調するGCFの基本方針からすれば、わざわざナンバリングして三王朝期を明確に区分する方法は、王朝交代に際して常に正当性の問題を抱えてきたフランス王権にとっては、ある種の危険性を帯びているように思われる。他方、フォリオ401からの後半部分も、内容から三つに分けることが可能である。最初は『歴史の覚書』の翻訳が終わる1322年までの部分、次にサン＝ドニ修道院の年代記に戻り、シャルル4世治世(在位 1322-28)半ば、1324年マリー＝ド＝ボエム(Marie de Bohême)の死までを記す部分、最後にサン＝ドニの記述を離れ、1329年までを記す部分、の三部分である。最後の部分には、1329年12月にシャル

ル6世の妻ジャンヌ=ド=ブルゴーニュ(Jeanne de Bourgogne)がアルトワ伯領に関して行った臣従礼や、翌年1月の彼女の死去などについての記述は見られない。したがってこの写本の制作は1330年の初め頃には終わっていたのではないかと推測される。またこの最後の部分、1324年から29年にかけての出来事を記した人物の名は知られていない。

この写本構成から次の論点を指摘することが出来る。①前半部分についていえば、王位継承の問題性が明らかになる危険を犯してまでなぜ1316年までの歴史を王朝ごとに三区分したのかが問われるであろう。また②後半部分については、フィリップ6世の即位を含む、カペー最末期からヴァロワ草創期にかけて、1324年以降1329年までの追記部分がいかなる内容を持つかが、この写本の性格を考えるうえでとりわけ重要である。そこで次に、1324年以降の追記部分を対象に、まず①1324年から1329年までの全体を通して、次いで②1328年から1329年にかけての王朝交代期に限定して、記述の特徴とその背景を検討する。

4 写本10132制作の背景と意図

(1)記述年代1324-1329年に関して

この期間の記述全体を通して指摘しうる特徴は、①フランス王朝史における新王朝ヴァロワ家領シャルトルの聖地的性格への言及、②新王朝初代フィリップ6世の父シャルルの英雄的事績への言及、の二点である。写本にこの部分の追記が施された1320年代末の時点で、シャルルが新しい王朝の創出にとってきわめて重要な役割を果たした人物であるとの認識は、フィリップ6世および彼の周囲では共有されていた。と同時に、シャルルが残した功績に対する人々の記憶も鮮明であった。そうした記憶と認識をGCFの「フランス史」のなかに歴史として織り込もうとする写本制作者の意図を、一連の記述のなかに読みとることは充分可能である。

(2)記述年代1328-1329年に関して

フランス王権におけるカペー王朝からヴァロワ王朝への交代はイングランド王権からの異議申し立てを受け、百年戦争の原因ともなっている。統治の正統性を考える上で最も肝要な王朝交代に関して、写本の記述には以下二点の特徴が認められる。①前王朝最後の王の死から、新王朝最初の王の即位の瞬間までの詳細な描写、②イングランド王権との間での王位継承を巡る争論の存在についての具体的な叙述。リシャール=レスコーによる修正版のGCF、あるいは14世紀後半の第二版GCFでは王朝の交代に伴って発生した国内外の緊張関係についての叙述が意識的に省かれており、編集と校閲を経た「正史」としての体裁を整えているのに対して、同じGCFの名を持つ写本でありながら、写本10132は王朝交代の具体像を同時代的視点から、ある種の楽観主義の下で記録している。

5 まとめと今後の課題

今回の分析は、これまで必ずしも積極的な評価が与えられてこなかったGCFの初期写本群に関して、その一つを制作当時の政治的社会的環境のなかに置き直してみることで、そこに当時のフランス王国における知的エリートたちのナショナルな意識、具体的には彼らの「フランス観」や「王権観」を考える手がかりを得ようとするものであった。写本10132の内容は、同時代人たちが有していた記憶に働きかけ、それを二人のヴァロワ家当主、シャルルとフィリップが立ち上げた新しい王朝への支持につなげようとする王フィリップの思惑をいち早く汲み取ったものになっている。1274年成立のGCFは当時のカペー朝の歴史観を忠実に反映したものであり、また14世紀後半の第二版GCFは、百年戦争を戦うヴァロワ王権のいわば正統派フランス史であった。それに対して写本10132は、「正史」とは一定の距離を保ちながら、新王朝の成立という歴史変革期の雰囲気荒削りながら生々しく記録している。イングランド王家との間で後に深刻化する支配の正当性を巡る争いへの緊張感や配慮と

いったものをこの写本から読みとることは難しい。したがって写本10132は、GCF写本でありながらまた同時に、新王朝成立時におけるヴァロワ家の王権観を伝える、ひとつの独立した歴史叙述とみなすことが出来る。そしてかかる理解は、GCF写本のそれぞれが持つ個性を文献学的言語学的知見も踏まえながら明らかにすることで、前近代社会におけるナショナル意識の重層性やその再編過程を構造的に把握することを可能にすると思われる。

さらに加えて、中世の主要メディアとしての写本は、その稀少性において印刷メディアや電子メディアとは大きく異なるものの、内容の改変可能性という点においては、作品のオリジナリティや著作権といったものが問題視されることの多い電子メディアとの類似性を見せている。したがって今後は、写本メディアおよびそれを生産・消費していた人びとが作り上げていた写本文化の基本的特質を、現在あるいは同時代の他文化圏と比較する作業を通じて、情報化社会を生きる我々とメディアとの関わり方について考えていくための一つの指針を得ることも目指したい。